

まちなかを継ぐ

—高岡への移住とその後の日々—

加納 亮介
KANOHIKE RYOKEI

冬の季節がやってきた。今年は近所のご夫婦から教わり初めてのかぶら寿しづくりに挑戦してみた。高岡産の大きなかぶらを塩漬けし、酢締めした鯖や人参を一つ一つ挟み込んでいく。今なお続く老舗麴屋「クゲエ麴店」のお母さんからのアドバイスに従って白米と混ぜた麴でかぶらをじっくりと漬ける。まちなかで今なおつくり続けているかぶら寿し屋の味には到底及ばないものの、クリーミーな甘みとかぶらの食感北陸の絶品である。

季節ごとに多彩な食文化や地域行事などを楽しめる高岡での暮らしも4年目を迎える。東京で暮らし始めていた頃には経験できなかった日々の暮らしが毎年新鮮であり、これが新たな挑戦の気持ちを奮い立たせる根源となっているのではないだろうか。本稿では、高岡への移住経緯とこれまでの挑戦について振り返ってみたいと思う。

し、結局は「旅の者」として訪れたに過ぎず、幼少期に胸をわくわくさせていた暮らしを体験できずに4年間が過ぎてしまっていた。

■地方都市の魅力に出会う

このモヤモヤした感覚が変わったのは現在の研究室(※1)に所属した2012年の時。瀬戸内海に面する斜面地の家並みが美しい広島県尾道市で空き家再生に取り組むNPO団体に参加させてもらった。車が入り込めないひっそりとした路地裏でのコミュニティや当時別荘として建てられた歴史的な建築物、生活感のある植栽や洗濯物の溢れ出しなど、震災や自然災害に遭わず代々受け継がれてきた歴史ある市街地の持つ魅力にハマっていった【写真1/2】。また、同じような価値感覚を持った地元住民や移住者たちがゆるくつながりを持ち、空き家を改修して住まいや居場所をつくっていく現象が次々と起きていた【写真3/4】。こうしてまちなが住み継がれていく様子を体感できたことが自分にとっては新鮮であり、とても心地よいまちとして映った。その頃から空き家活用によって人や建物が循環していく地方都市の様子を色々な人にも知ってもらいたいと思い、研究として論文を書

1. なぜ地方都市だったのか

■田舎暮らしへの憧れ

私は東京の大会に生まれ、その後は実家のある千葉県千葉市で育った。大都市圏の住宅市街地では近所付き合いが少なく、学校にもバスで通学していたこともあり幼い頃から田舎暮らしが憧れだった。当時のテレビ番組は、地方の風情あるまちなみを散策する旅行企画や第二の人生として里山での農業暮らしを提案する企画などが少しずつ注目を浴びていた。春の田植え作業や採れたての夏野菜を使った郷土料理づくり、近所の名物おばあちゃんのお茶会など、画面の向こうに映る田舎での暮らしが心のどこかで羨ましく感じた。大学に進学してもその気持ちは変わらず、「テレビに映っていたあの姿を体感したい」という想いで全国各地へひとり旅に飛び出した。地方都市の田舎道を歩いていると、たしかに畑作業の風景や井戸端会議の姿を見ることができた。しか



写真1：路地裏界隈の様子／商店街から一步踏み込むと日常の暮らしが感じられる



写真4：ゲストハウス「あなごのねどこ」／空き家を活用して新しい空間が次々と生まれている



写真5：緑青が鮮やかな銅板葺きの町家建／鋳物のまちであることがまちを歩くと感じられる



写真6：100畳の大広間／老舗の旅館や商店が数多く残っている

きたいと考えはじめた。そんな中、研究室の指導教員から紹介を受けて訪れることになったのが富山県高岡市であった。

2. 高岡への移住を決意

■ はじめての高岡へ

はじめて高岡を訪れたのは2013年5月。JR高岡駅(※2)北口広場の工事が進められる一方でレトロな駅前ビルが営業を続け新旧の混在している雰囲気はどこか懐かしさを感じたことを覚えている。その日は高岡まちっこプロジェクト(※3)主催のまちあるきイベント「たかおかまちなかあるき〜ときどき空き家〜」に参加することが目的だった。雪国特有の内蔵付きの空き家に驚きつつ、黒瓦の町家が建ち並ぶ中を路面電車が走る風景を楽しみながら総勢30人以上の参加者とともにまちなかを歩いて回った【写真5/6】。ひとり旅の時とは異なり、このイベントで出会った人たちは次の出会いが広がるきっかけとなるとともに、現在でも一緒に活動するメンバーでもある【写真7/8】。今思い返すと高岡への移住を決意する上で大切な場であったように思う。



写真3：ある日のアキチ公園／子育て世代の移住者による井戸端会議が自然と開かれる



写真2：尾道水道から眺める斜面市街地／様々な要因が重なり空き家が増加している

■移住の決め手は

このまちあるきの時にみつけた築80年の空き町家をゲストハウス（現・町家体験ステイハウス ほんまちの家）に活用するプロジェクトが2013年の春からスタートした。完成までのプロセスを多くの人たちと共有したい、というプロジェクトの想い（*4）に興味深く感じ、大掃除会・蚤の市などのイベント企画や開業に向けた検討会議の運営などのために東京から通うことにした【写真9】。

その後、高岡への移住を決意したのは同年10月のこと。就職か進学か、大都市か地方か、高岡か他のまちか。色々悩んだ結果、これからの高岡のまち（特に歴史的な基盤や資源が色濃く残るまちなか）でなにか面白いことが起こりそうな予感があったことが一番の理由であった。そのように思った背景には、大きく3つのまちの特徴が挙げられるように思う。

特徴①…明治33年の大火以降、各時代の建物が生活様式や家族構成に合わせて増改築を繰り返されて受け継がれてきていること（そのため、山町筋

や金屋町のような伝統的建造物群保存地区以外の場所に歴史ある町家や土蔵造りが残っている）【写真10】



写真10：昭和初期に移築された町家／茶室や内蔵のある魅力的な町家を現在は富山大学生がシェアして活用している



写真9：ほんまちの家でのDIYワークショップの様子／柿渋塗りと漆喰塗りの作業を子供たちと一緒に楽しんだ



写真7：まちあるき後の交流会／大学生や職人、経営者など様々な職能を持つ人が参加した



写真8：まちあるき後の意見交換会／司会進行をしながら空き家の活用方法やまちの将来像などを語った

特徴②…銭湯や八百屋、魚屋、喫茶店、麴屋など、日々の暮らしを支える商店が今なお多く営んでいること【写真11】

特徴③…高岡まちっこプロジェクトをはじめ、建築家や不動産業者、伝統工芸士、料理人、ツアーガイドなど、様々な職能をもつ20〜40代のUターン者やインターン者がまちなかで生業をつくったり、新しい取り組みをはじめたりしていること（比較的最近5年での出来事）【写真12】

3. これまでなにを取り組んできたのか

■高岡のまちなかの現状

城下町を起源とする高岡のまちなかは、一国一城令による廃城後、商人や職人を中心とした商工都市として栄えた。人の往来や物流の結節点として北陸の発展を牽引してきた近代以降は、人口増加とともに市街地も拡大してきた。しかし、人口減少時代に突入した近年でも新高岡駅を中心とする郊外開発が続く、まちなかでは世帯数の減少や居住者の高齢化が、空き家問題や自治会の継承問題を顕在化させてきている。こうした現象の背景には職と住の関係が大きく関係しているのではないかと私は



写真11：喫茶店HERAの外観／朝は出勤前のお父さん達がカウンターに集まり会話を楽しんでいる



写真12：comma, coffee standの外観／空き家を活用してカフェやパン屋などをはじめめる動きが少しずつ増えている

考えている。昔はミセの間で商売をして奥の間には家族の空間が広がる関係、または歩いて商店に通える場所に

住まいを構える関係が大半であった。2世代ないし3世代が一つ屋根の下で暮らし、親から子へ職が受け継がれることで建物も次の世代へ住み継がれてきたのかもしれない。しかし、高度経済成長期に入り、業務の拡大や効率化を目指した産業の郊外集約（※5）を契機に職と住は分離し、住まいの場所の選択に自由さが生まれた。その結果、核家族を好み、郊外住宅地や大都市圏に新しい住まいをつくるのが現在の主流となり、まちなかに暮らす親世代が亡くなった後の建物は誰にも住み継がれることなく空き家化、空き地化することが多くなっているのである（図1参照）。こうした現象は、高岡のような歴史的な基盤と資源が多く残る全国各地の市街地（※6）でも起きつつあると考えられる（図2参照）。

果たして住み継ぎの循環が停滞しているまちなかを今後どうやって次の世代へ継承いけば良いのだろうか。私が高岡へ移住して感じたこの大きな課題に対して、これまで様々な試行を繰り返してきた。

■取り組み①…暮らしの魅力を継ぐ窓口づくり

―町家体験ゲストハウスほんまちの家―

ほんまちの家は築80年の町家を改修し、2014年5月にオープンした町家体験ゲストハウスである【写真13】。近年全国的に増加している「ゲストハウス」は、一般的なホテルとは少し異なった空間や交流を体験することができる宿泊施設である。宿泊者や地元住民がリビングに集まり、まちのおすすすめスポットを紹介したり旅の情報交換をしたりすることで「暮らしのような時間」を過ごしてもらっている。特に、高岡町家らしさ（外観からは想像できない立派な内蔵、光沢のある漆塗りの柱、繊細な造りが美しいさまのなどを残したほんまちの家での滞在を通じて「いつかはまちなかに暮らしたい!」「古民家を活用してお店を開きたい!」と思ってくれる人が一人でも増えていくことを目指している。夏は蝉の声を聞きながら通り抜ける涼しい風を感じ、冬は湯たんぽを抱えながら寒さを楽しむ。お隣さんから暮らしの音が漏れてくる安心感やご近所さんとの何気ない日々のあいさつなど、暮らしの距離感や習慣、四季によって変わる環境をカラダで感じてもらいたい【写真14/15】。また、町家での時間だけに完結させず、まちな



写真13：ほんまちの家の外観／ロゴやのれんは富山大学芸術文化学部生（以下、芸文生）がデザインした



写真14：町家縦断流しそうめんの様子／宿泊者もご近所さんと一緒に楽しめるように季節ごとのイベントを企画している



図1：まちなかの現状／高岡の市街地は明治後期から高度経済成長期までの間に4.8倍、さらに現在までの約100年間で15.8倍に拡大していることがわかる。そのため、市街地の中でもまちなかには特に歴史的な建築物や文化が色濃く残っていると考える。最近20年間に着目すると、市全域の世帯数は増加している一方、まちなか（＝歴史的市街地）の世帯数は減少へ転じており、今後も空き家等が増加することが予想される。また、年齢別人口をみると各年代がこの20年間で減少していることがわかる。特に当時20代、40代だった年齢層の減少数が大きく、郊外や県外への住み替えが起きていると考えられる。



図2：住み継ぎの循環が停滞する状況

生活する人たちの様子や暮らし方が伝わるようにまちなかを案内することも心がけている。近所の銭湯や魚屋、地元密着のスーパーや赤提灯の居酒屋など、日常の風景が感じられる場所をおすすめしている。お店の大将や番台さんと仲良くなつて「またみなさんに会いたいので遊びに行きますね!」と宿泊者が残していくメッセージはこの場所を続ける大きなモチベーションである。移住や定住をしてくれる人が増えるだけでなく、まちなかを魅力的に感じ《第二の故郷》のように足を運んでくれる人が増えていくことも、まちを住み継ぐ一つの形なのかもしれない。

■取り組み②…多世代が支え合い自治会を次の世代へ継ぐ場所づくり — 博労町まちかどサロン
「みんなが気軽に集まれる場所をつくりたい」という声からはじまったまちかどサロンづくりがいよいよ完成間近である。

2014年から博労小学校周辺の住民のみなさんとまちづくりの話し合いを進めてきた。木造住宅が密集していることを背景とした防災対策がスタートのきっかけであったが、議論を進めていくと防災だけが論点ではない

ことが明らかになってきた。そんな中、「幅広い世代の人たちがもつと気軽に顔を合わせるきっかけづくりからはじめていきたい」という住民の声が挙がってきた。そのきっかけづくりとして着目したのが大正時代に建てられた旧文房具屋の空き家であった【写真16】。かつての街道沿いに建つこの町家は、学校帰りにここでノートを買いに寄ったり、お菓子を買いに行ったりして子どもたちのたまり場の存在だったそうだ。最近では、5月1日の御車山祭の時に母衣の展示場所兼休憩所として毎年利用しており、住民にとっても思い入れのある場所でもあった。まちかどサロンの特徴は、これまでの公民館と異なり、この場所づくりを通じて希薄になりつつあるコミュニティを再構築すること、また自治会の主役となる若者世代へバトンを渡すこと、そして城下町時代から続く町の歴史(*)を伝え継ぐことを目指している。そのため、検討段階の時点から利用イメージを膨らませる企画を試験的に挑戦してきた。この町家からの掘り出し品による蚤の市、子供から大人まで楽しめるまちかど映画館、小学生対象に夏休みの自由研究勉強会、芸文生の有志によるまちなか展示会など、完成したら足を運んでみたくなる、自分でも使ってみたくなるような雰囲気づくりに力



写真16：まちかどサロンの外観／かつては文房具屋として賑わっていた



写真15：ごはん交流会ほんまちのヨル／参加者同士が仲良くなり翌日一緒に遊びに行くこともよくある

をいれた【写真17／18／19】。

2017年10月から工事ははじまり2018年3月には完成予定。こどもたちからお年寄りまでが一つの輪になって楽しいな話を交わす空間は、次の新しい若者たちが定住するための相談窓口や自宅の町家改修を考えるモデルハウスなど、様々な切り口からこの地域の持続性を支える場所になれるように運営の段階へと向かう。

■取り組み③…かつての記憶を継ぐ仕掛けづくり ― 思い出地図づくりプロジェクト

2017年度は、土蔵造りのまちなみが残る山町界限における1960年代頃の記憶や思い出を集めて地図に表現する「思い出地図づくりプロジェクト」が芸文生や東京工業大学の学生を中心にはじまった(*8)。今では「まちなか」という言葉で括られることが多いが、かつては繊維問屋業や金融業が集積していた山町をはじめ、海産加工業が盛んだった中川原町、大衆娯楽で賑わっていた下川原町、青果物流の拠点だった二番町など、町ごとに異なる職能をもった商人や職人が集まって働き暮らしていた。それぞれの町が互いの暮らしを支え合うことで高岡という大きなまちを形成していたのである。その当



写真17：建物の大掃除会／住民が丸となって中の家財や生活用品を片付けるところからスタートした

時の生業や暮らしの様子をより鮮明なものにするため、一人一人が覚えていた思い出話やスナップ写真などの収集作業をこの1年間地道に続けてきた【写真20／21】。「かつては野菜や魚を大量に積んだ荷車が町中を行き交っていた」「暑い夏は千保川で泳いで遊び、冬は川原の斜面でスキーをして楽しんだ」「戦後間もなく、住民の協力により夜の山町筋にはネオンが灯っていた」など、職業や住んでいた町によって思い出される風景が異なることが興味深く、更なる探究心につながった。こうした貴重な生の記憶を可視化して発信することが、時代によって変化しながらも高岡のまちなかが脈々と受け継がれてきていることを再認識するきっかけとなつてほしいと願っている【写真22】。そして、自分たちがこれからのまちなかをどのように引き継いでいくかを考えるはじまりでもある。

4. 最後に

前述の取り組みは、それぞれがバラバラに動いているように見える取り組みではあるが、いずれも「継ぐ」ということが意識の根底にはある。町がもつ個性を白紙にしてつくり直すのではなく、時間の経過や世代の継承と



写真18：エコバックづくり／幅広い年代が気軽に集まれる雰囲気をつくるために全5回イベントを企画した



写真19：芸文生による展示会の様子／作品を通じて地元住民と会話をするきっかけとなった



写真20：思い出の集まった地図／収集した思い出は旗に記して山町ヴァレーにて展示している



写真21：インタビューの様子／地域の住民ひとりひとりに丁寧な思い出を伺った



写真22：川原町にある若井家住宅／思い出をたどるまちあるきイベントには多くの地元住民が参加した

ともに作り足していくことでこそ、まちなかは豊かな暮らしを送れる場所となりうるのではないだろうか。そんな想いが日々の挑戦する気持ちを奮いたたせてくれている。

【註釈】

*1 当時は東京工業大学社会理工学研究科社会学専攻真野研究室

*2 現在はあいの風とやま鉄道高岡駅

*3 若者世代のまちなか居住促進を目指して活動する市民組織。建築業や伝統産業、金融業など職業は異なるもののUターンなどを経てまちなかに対してなんらかの思いや問題意識を持つ4人を中心に富山大学生や移住者、まちなかの住民などによって構成されている。
①空き家を活用による新しい場所づくりや②ワークショップ開催による移住希望者や開業希望者の応援、③イベント開催によるまちなかへ訪れるきっかけづくりなどに取り組んでいる。

*4 詳しくは「都萬麻03」の高岡まちっこプロジェクトの節に記載

*5 高岡問屋センターは1968年、高岡市地方卸売市場は1965年、高岡銅器団地は1977年にそれぞれ開業

*6 高岡市のような歴史的な基盤や資源が残っている都市は全国で約

335都市存在する（1888年の市制・町村制制定時に市または町として成立し、これまで戦災や大規模災害に遭っていない都市）
※7 町の中心に建つ極楽寺は、5月1日に開催される「御車山祭」での巡路となっている。まちかどサロンは、自治会が所有する母衣の展示空間であるとともに山町の休憩場所としても活用される予定である。

*8 2017年4月、山町筋の小馬出町に複合施設「山町ヴァレー」がオープンした。この施設運営の中で町衆文化情報発信事業の一つとして思い出地図づくりプロジェクトが開始された。